



タカラ産業株式会社

タカラ産業株式会社(静岡県富士市)は、トラック用スペアタイヤキャリアなど、独自の商品を生産・販売している。日本国内を走るトラックでキャリアなど同社製品を全くつけていない普通トラックは2割程度に過ぎないという市場シェアを誇るほか、自社開発商品にはほかにない強みを持つ。インドネシア人技能実習生の受け入れは2012年から開始。現在は2人が金属プレス加工を学んでいる。



渡邊哲史代表取締役社長

■改善活動で提案・実行力を引き上げ

タカラ産業(株)は、1960(昭和35)年創業でスペアタイヤキャリアを生産していた中央製機株式会社と、その製品に特化した商社として設立されたタカラ産業株式会社を2010(平成22)年に統合して現在に至る。生産部門と商社部門の両方を併せ持ち、トラックメーカーの「下請け」ではなく対等な「取引先」としての実力を兼ね備えた独自の製品開発が強み。

秀逸なのは、売上高のうちなんと96%が「自社開発商品」である点。「かゆいところに手が届く」その開発力は創業当時から続く伝統で、新しいアイデアを具現化できる社内環境と職人の技が安全かつ快適なトラックの実現に重要な役割を担っている。

現在、同社を率いるのは、中央製機(株)を創業した渡邊芳男氏のご子息、渡邊哲史代表取締役社長。商社部門との統合による経営の一本化を決断・実現したのも現社長で、広い見地に立った経営で大きな経営効果を上げ、厳しい時代にあっても成長し続ける企業に育てている。

5S(整理、整頓、清潔、清掃、しつけ)を中心とした「改善活動」を継続的に推し進めており、一時は年間900件近い改善案が従業員から出されるほどだったという。これらの改善案は、文部科学省が主催する創意工夫功労者賞を何人もの従業員が受賞するほどのレベルで、非常に熱心

に取り組まれていることが見て取れる。

「どんなにささいなことでも、提案・実行を」と、提案しやすい社内環境を実現し、従業員が自由に意見を出しチャレンジできる雰囲気は渡邊社長によって醸成されている。

一方、主要な取引先の一つ日野自動車株式会社は世界市場でのシェア拡大策の一環としてインドネシアでの生産を強化。部品のインドネシア国内調達を目指す体制になったことから、スペアタイヤキャリアなど重要部品を生産・納品しているタカラ産業(株)もインドネシア進出を決断。来年には生産を開始する見通しだ。

日野自動車(株)の部品検査の厳しさは渡邊社長曰く「世界一厳しい」そうで、その検査で認められているタカラ産業(株)のスペアタイヤキャリアは140~150キログラムのタイヤも積載可能な高品質。日本国内を走る普通トラックのうちスペアタイヤキャリアではおよそ50%、そのほかの商品も含めると80%以上は同社部品を搭載しているほどの実力を備える。渡邊社長は、特にスペアタイヤキャリアについては、その頑丈さ・スマートさ・使い勝手では「世界一」と自信をのぞかせ、世界でも勝負できる技術・開発力を実感させる。

「自社開発商品で勝負」

～日本滞在で大きな成長を期待～

■得意見つけて伸ばす指導を

日野自動車(株)のインドネシア国内での部品調達強化策を受け、インドネシアへの進出を具体的に検討し始めたことから、インドネシアを知り、インドネシアの人材を育成・開発しようと受け入れを開始した。

現在、金属プレス加工を学ぶ2人について渡邊社長は、まじめに取り組んでいると評価。日本語でのコミュニケーションも取れており、これまでのところトラブルにつながるような事案は起きていないそう。現場で一緒に働くみな

さんも面倒見の良い方が多く、特に技能実習指導員の方が十分な指導をしてくださっているようで、技能検定の際には検定委員から「しっかり指導してもらっていて実習生の2人は幸せだね」とのコメントがあったという。

社長自らが講師となり、実習生向けの勉強会も催していただいているほか、周辺作業として取り組む溶接での器用さを非常に買ってきてくださっており、2人の将来のためにも溶接にかかる技能評価試験にチャレンジさせたいと、

さらに高い到達点を目指す環境を整えてくださっている。

実習生が日本で実習に取り始める期間は実に短い。だからこそ「濃い実習を」との思いで技術や製品知識、将来に生きる実習を実施していただいている。

社長はまた、現在、同社で学んでいる技能や同社ならではの商品知識を、来年に稼働を予定している現地法人でも生かしてもらえる日が来れば何より、との夢を語ってくださっている。それだけ現場で頼りになる存在に成長しつつある証拠でもあり、期待に応えようと頑張る実習生の様子を確かに受け止めて評価いただける環境で、残りの実習期間にも大きな成長が期待される。

■変わる自分を感じる日本滞在に

渡邊社長は、台湾に2年、英国に1年それぞれ滞在された経験があることから、実習生の受け入れにあたって多少の不安はあったものの「来れば何とかなるだろう」とご自身の経験から楽観的にとらえていたそう。また事前にジャカルタの研修センターを訪問し、規律正しい集団生活の様子を見てさらに「きっと大丈夫」との思いを強くされたという。

実際に実習生が日本に来てからも大きなトラブルはなかったとのことで、実習生が勉強している日本語だけではなく、現地進出に向けて学習中のインドネシア語も使って

コミュニケーションしてくださっている。

忘年会や新年会などのイベントに参加させていただいているほか、焼肉やちゃんこ鍋も食べに連れて行ってもらったそうで、みなさんと楽しい時間を過ごさせていただいたようだ。

休日には、社長自ら富士山に連れて行ってくださったり、若手の日本人従業員の方にあちこちへ誘ってもらったりしている様子。土曜日には近くの図書館で行われている日本語教室に通っており、ともに学ぶ各国の友人も増えているよう。日本文化にも興味があり、「いつか京都に行きたい」と話しているほか、初めて見る雪に喜んだり、河口湖でスノーボードに挑戦したりと、実に充実した日本生活を送っている。

海外生活の中で社長は、「変わっていく自分」を実感されたそうで、度胸がついたり積極的に became たりの変化があったと振り返る。実習生たちにも同じように日本滞在を成長の契機にしてほしいと考えておられるようで、休日にあちこちに出かけて貴重な経験をしてくる実習生たちを温かく見守ってくださっている。

遠出した実習生の無事の帰宅を願いながらも、「彼らのことを信じていますから」とさわやかな笑顔で話す社長のもと、何かと心を砕いてくださる現場のみなさまにも恵まれ、またとない貴重な実習期間を過ごせることだろう。

実習風景紹介



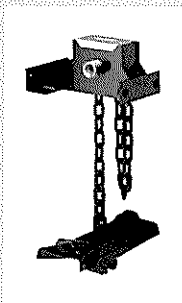
ディマス



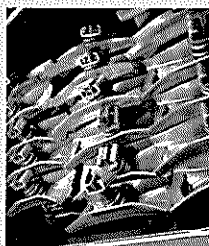
ブディン

主力商品

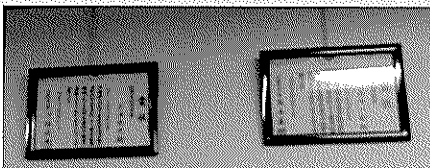
スペアタイヤキャリアの一例



加工途中の部品の例



社内には、文科省からの表彰状が何枚も並ぶ



作業の様子



社屋から望む富士山



工場全景